

会議名 令和元年度 第2回思春期保健ネットワーク会議

開催日時 令和元年9月3日(火) 19:00~21:15

開催場所 八千代市保健センター

会議次第 1 開会

2 議題

(1) 思春期保健の現状と課題

3 事務連絡

4 閉会

出席者

(委員) 柳堀厚・土井弥寿子・鶴岡利江子・宮崎秀典・中嶋弘典・榊奈都美・内田颯一
・原久見子・和田真沙美・茅島江子・東亜紀

(事務局) 母子保健課 中村あゆみ・川崎絵美子・松枝恩

欠席者 0人

公開非公開の別 公開 傍聴人0人

1 開会

2 議題

(1) 思春期保健の現状と課題

柳堀会長: 数名の委員が到着していないが、時間になったので始める。欠席の報告はあるか。
事務局中村: 欠席の報告は無い。遅れるということで土井委員と鶴岡委員から連絡有り。

柳堀会長: 今年度第2回目の会議を開催する。まず事務局から説明がある。

事務局中村: 会議に入る前に委員の皆様にお知らせする。当会議は、八千代市審議会等の公開に関する要領に基づき公開することになっている。

続いて資料の確認。机上に配布している資料は、本日の次第。参考資料として、「令和元年度家庭教育通信1号」を配布。茅島委員から8月24日に開催された「第38回日本思春期学会」の学術集会プログラムの提供あり。こちらは、抄録集も回覧する。また、前回相談した中学1年生とその保護者に配布するリーフレットが完成し、各中学校へ配布済み。では、このあとの議題進行については柳堀会長にお願いします。

柳堀会長: 第1回会議に出席していない方もいる。本年度は、シンポジウムの開催の予定は無い。原点に立ち戻って今の思春期の性教育を含めた子供たちの、思春期を取り巻く環境を理解したうえで、我々がどのように動けるのか。基本的には、会議のための会議だと意味がないので、これを実践していく、というのが一番大事になる。この状態だけで済むのは非常にもったいない。これだけのメンバーの相互理解をしたうえで、今年は改めて何ができるか、性教育の現場も変わってきていることを、自分でも感じているので、この会で勉強する気持ちで参加している。よ

ろしくお願ひしたい。前回自分が行っている性教育について紹介した。それに引き続き、感じていることを各委員に言っていただく形で、今回は鶴岡委員に現在行っている話をさせていただく。私は、医師の立場から行う性教育を話したので、鶴岡委員がやっていることをお話いただけたらと思う。保健体育課からも少しお話を伺いたい。前回私が言っていたことが例。鶴岡委員が一番プロなので、そこら辺のところを少し話していただければと思う。

鶴岡委員：千葉県助産師会で、習志野保健所管轄の習志野・八千代・鎌ヶ谷を中心にした助産師会で活動している。私たちが命の授業とか性の話を始めたのが17年ぐらい前。習志野市では、乳幼児の子を持つお母さんのクラスが公民館の中にある。それは幼児家庭教育であり、助産師が呼んでいただけるようになった時、母親から性器の手当の相談があった。その中で、もっと性について聞きたいと声が上がってきて、依頼を受けるようになった。子育ての話、性器の手当て、お母さんの体の変化、家族の中のバランス等について、一緒にお話するようになってきた。乳幼児クラスの母の子が小学生、中学生になった時に、子どもと一緒に聞きたいと希望があり、講座を受け持つようになった。現在、「あなたが大事だよ」と命の講座を小学校全部で実施。中学校は「命と性について」の話を助産師2人で習志野市の7つの学校全部で実施している。年間ではメンバー5人程度で80か所を回っている。乳幼児クラスのお母さんや小学校の子ども、中学校の子どもの他に中学校・小学校の母親のみのクラスも呼ばれて行っている。小学校児童へは、命の話として「あなたが大事」という視点を主に伝えてきた。10年ほど前、学習指導要領が見直された際、性交（受精卵がどこでできるか）を集団指導として扱えなくなった。子ども達は4年生で二次性徴を学び、5年生の理科では、メダカを通して精子と卵子が受精して受精卵となりいのちが始まることを学ぶ。また、人の誕生も理科で扱われているが、受精卵がどのようにできるかの仕組みを伝えないまま出産に飛んでしまう。メダカでは受精もするし、交尾もするのに、「人間は」となったときに聞けなくなってしまった。保護者から家ではどのように伝えればよいかという質問があった。最近変わってきたのは、学校でもこれは命の話の中に入れてもいいのではないかと意見が出始めて、現在習志野市では3分の2くらいが命の話の中に性交は入っている。精子と卵子が結ばれて命が産まれると話す学校が多い。中学校でも教科書上では性衝動とか性行為という表現だが、あまり制限がなくなり、外部講師の立場では性交という言葉を使って良いことに打ち合わせの時になっている。八千代市では、八千代台西・東・八千代台小学校でお声掛けいただいて、展開中である。

柳堀会長：長く活動されていて、最初の頃の周りの反応と比べて変化はあるか。

鶴岡委員：始めた頃は中学校でも、ペニスという言葉でもお叱りをいただいて、ペニスとい

う言葉を使うのに何年もかかった。性行動についても性交という言葉を使わないでエイズを説明してほしいという依頼が多かった。難しいと思ったが、工夫して実施する時期もあった。考え方がどんどん変わってきているので、最初は「命が大事」ということで出てきたものが、最近、学習指導要領に「生きる力」とか、大事なキーワードがある。同じ扱いでも、シングル家庭が増えてきたり、色々な事情がある中で、科学的に伝える趣旨になってきている。「奇跡的な命」とか、「選ばれたいのち」という言葉を使わないというような流れもたくさんある。基礎を科学的に伝えるというのは、私たちも一緒だが、助産師の立場からは命懸けで生まれているということ伝えていく。

柳堀会長：鶴岡委員には、シンポジウムでも話してもらった。私は聞いているので、聞いていない委員の方に次回以降時間を取らせてもらい、具体的にどのような内容か伝えていただきたい。対象者により内容は違うと思うので、時間が短いと十分に話せないかもしれないが、皆さんに伝わるように説明をしていただきたい。

私から質問で、習志野市はそれだけの小学校中学校全校回っていますが予算は習志野市のほうから出ているのか。

鶴岡委員：習志野市の教育委員会からは出ていない。

柳堀会長：教育委員会からではなく、習志野市からか。

鶴岡委員：学校で話す場合も、公民館から呼んでもらい、保護者が公民館と交渉して、家庭教育学級という枠組みのなかで呼んでもらっている。PTA で予算を考えてくれる学校、家庭教育学級で出す学校、半分ずつ出す学校と、4種類くらいの方法で講演している。

柳堀会長：予算は統一しているわけではなくそれぞれ違うが、継続している。八千代市で行う場合、そういう方法が一番いいかと思う。先生方が八千代で実施していただく場合、どうしても予算の問題がある。習志野市の子供達は、先生方の話を聞いて育つ。八千代もそのようにどこの学校も助産師会の話聞いて八千代市で育ってほしいので予算的な部分を少しずつ思春期ネットから提言するもの必要かと思う。各学校でPTA から出る場合もあるし、公民館とタイアップする、それが全部ですから凄い。

鶴岡委員：8割がPTAの予算に組み込んでいる。一度組んでいただいて、引継ぎをしていただくようにしている。一番望ましいのは、お子さんと保護者に年間2回実施する。保護者に先に話して安心していただく学校もたくさんある。そのあと、お子さんに聞いてもらうようにしていることが多い。

柳堀会長：参考になる。もう一点、学校との事前準備で制限はあるか。学習指導要領に基づいて、スライドチェックなど厳しいか。

鶴岡委員：初めての学校は、資料を提出して全てチェックしていただいて承認していただく。

柳堀会長：そのチェックは厳しいか。

鶴岡委員：学校の中でこれだけのプログラムをやりたいというところが少ない。「ここをやってほしい」と希望があれば、話を絞って実施できる。学校の先生が思春期の話をするのは難しかったり、毎日会う先生が性のことを説明するのは辛いこともある。「ここを話してほしい」と絞らない学校もある。保健の先生と体育の先生とのミーティングで、このような話をするのか、苦手だと思う人もいる。

この話は済んでいるので、ここの話をしてほしいという学校は17年間で1校だけです。あとは、学習指導要領を勉強して、教科書ではこう書いてあるがこの表現ではなく、こちらの言い方で言わせていただきますと話をする。ここ何年間は何頼いただいているので、制限はない。

柳堀会長：校長は聞きに来るか。

鶴岡委員：出張のことが多い。

柳堀会長：そうですね。始めに挨拶があるが、なかなか話を聞いてくれない。話が終わるとどこからか出てくる。最近では、思春期ネット出身の校長先生が多くなってきて、聞いてくれるようになった。校長先生が聞いてくれると違うと感じる。

東委員：私は年間5件行っている。主に浦安市だが、校長先生が来ていることもある。形式的な挨拶もあるが、話を聞いている。浦安市は市で何年か前から予算が組まれていて、全ての小学校で健康教育をする。あとは、出所は違うと思うが、子育て支援センターで夏休み企画ということで、赤ちゃんサロンに来ている母に協力してもらって、助産師・保健師が話をする。小学生中学生が参加して、実際に赤ちゃんに触れ合う機会を設けている。

柳堀会長：浦安市は何か所くらいありますか。市全体で実施しているのか。

鶴岡委員：浦安市と柏市は行政とタイアップしており、実施件数も千葉県でトップクラスに多い。教育委員会の予算がついていることも特徴です。

柳堀会長：それは教育委員会の予算か。

中嶋委員：習志野市がやっているPTA予算というのは、市では予算が組めないが無料で実施というのは難しい場合、PTAで予算を組んで実施するやり方がある。教育委員会で予算を組むと各校に何らかの項目でお金を落とすのだが、それがどのような費用対効果があるのかを説明責任として持たないといけない。鶴岡委員に来ていただいたことで、子ども達の心の中にある思春期の悩みがどれだけ解決したか指標を図ることは難しい。そうすると、これから新規に予算を依頼しても付きづらい。市長からトップダウンで指示があれば出来るかもしれないが難しいと思う。

柳堀会長：なるほど。お金の話ばかりになってしまってますみません。

榊委員：教育委員会から学校ごとに講師予算はあるが、それも凄く僅かでそれをどう使うかは学校による。現在、健康教育の予算はつけてもらえない。健康教育も性だけでなく色々なことが大切なので、歯のことや、薬剤師の話など、体の健康教育でも様々あり、性のことだけ予算を取るのは難しい。法律に則っていたり、義務になっていない

と八千代市は予算が難しい。八千代台西小で鶴岡委員に来ていただいた時は、PTAが「やりたい」と言ってくださり、PTAの保護者が動いてくれたので助産師会に来てもらうことができた。PTAの予算も学校の教師全体の承諾があったから出来た。その為、全校で性のことだけにPTA予算を使うのは難しい。

柳堀会長：PTA代表からはどうか。

宮崎委員：私は話を聞いていると凄く興味はあり、自分の学校でもやって欲しいと思う。

PTAの決定権がある事に驚いた。知らなければ「やってください」と言えない。

PTAは1年目だが今の話は初めて聞いた。PTAの活動も各学校の本部と先生方で動いているような感じがある。そのため、全校の保護者に説明しなければいけない。学校の行事に興味のない保護者もあり、知らない人は知らないままPTAと学校で動いている印象を受ける。PTAしだいでは貴重な話が聞けるということも知らない人が多いので、PTAの代表になったらこういう話を聞いてほしいと思った。

柳堀会長：そうですね。PTAは代表が毎年変わるため、継続しようという気持ちの人がいつもあるわけではない。実際PTAの予算はあるのか。

宮崎委員：私も総会の時に予算を見るだけなので、詳細は分からないが、繰り越し金はあると思う。

中嶋委員：一人一人の負担額は同じなので、お子さんの人数が多ければ、一度に使うお金はたくさんある。小さい学校はある程度何年か積み立てて使用する方法になる。

柳堀会長：継続して行うためには、予算の問題が一番大きいと思う。講師を呼ぶのに「この予算で？」ということがある。やはり、市がバックアップする必要があるのではないか。金額的なこともこの会で提言したり、PTAの予算にも会長が変わってもそういう動き方があるのだとこの会で出来ると思う。こうやって意見を聞くだけでも、思春期ネットワークで話をし、方針ができたので是非お願いしますということは事務局の方からは可能か。予算を教育委員会は難しいが八千代市として予算を付けることは可能か。

原課長：予算の可否について即答はできない。

柳堀会長：どこから予算が付くのか。母子保健課から付くのか、学校教育だから教育委員会なのか。浦安市はどこから出ているかわからないが、予算が出ている。習志野は家庭教育学級とPTA。そこら辺からできればいいと思った。

鶴岡委員：習志野市は小さいので家庭教育学級を行う時に母親から委員を出す。その委員が年に何回か会議を持って、市でリーダーを育てる会議がある。その母親達が次の中学校に行った時にリーダーシップを発揮する。その方がPTAに入り、去年どんなことをやって何が良かったかという話し合いの場で推薦してもらったのが一番。隣が船橋市なので、船橋の方に広がっているが最初からPTA会費を組んでくださっている。学校により、児童から費用を集めることが1校だけあった。児童が少な

い学校は値上げをしていない。教材にお金がかかり、費用は儲けや利益はでない。赤ちゃん人形等はたくさんの児童が触れると壊れてしまう。社会貢献としてメンバーとやっているのが現実である。正直、金額は驚くと思う。習志野市は1学年200人という生徒を助産師3~4人で行く。最低限3万円ないと厳しい。金銭的に厳しい学校では、2万3千円としていて、それを切ると継続は難しいのでご理解いただいている。

柳堀会長：そうですか。私ばかり質問しているのでどなたか質問はあるか。

東委員：予算のことに戻ってしまうのだが、浦安市のふれあい体験、小学校5年生の夏休みに行っている事業は、浦安市少子化対策基金というものがあり、その予算でふれあい体験事業を行っている。

鶴岡委員：船橋市も同じように国から降りてきた予算を使っている。市で取り組む時に、助産師会を呼んでいるのは、ほぼその予算だと言っていた。小中学生で子どもとの触れ合いは学会でも効果がでていると評価あり、中学校くらいの時に、赤ちゃんを抱っこするような体験をすると良いと取り組まれている。

柳堀会長：浦安の方は希望者か。

東委員：その通り。夏休みに実施するので、小中学校は授業が終わる頃にチラシを配り、市内の高校にもチラシを配布している。募集の方法は電話。スマートフォンで対応できるようにならない。事業としてはとてもいいのに参加者がとても少ない。特に中高生は大会などがあるので参加人数は少ない。小学校5~6年生は結構来る。広報の周知方法を検討しないといけない。

柳堀会長：八千代では、少子化対策などはあるか。

原委員：子育て支援センターの方で、遊びと交流の広場等を行っている。先ほど、浦安の子育て支援センターのサロンについてや、公民館とのタイアップで実施していると聞いたので、何か工夫の余地があるかどうか。来た方はよかったと言ってくれるが、そういった効果が継続して、次の世代の人たちが育っていくことをアピールしていく必要があると思う。

柳堀会長：性教育は少子化対策に繋がると思う。子どもが、赤ちゃん体験をして気持ちが変わると思う。今やらないといけないことなので、少子化対策になると思う。

原委員：そういった意味で、思春期世代に働きかけていくことは大事。予期しない妊娠、自己肯定感の低下など、色々な問題に対して支援が必要になることが多いので、そうならないために親世代も含めて話していく必要があると感じる。

柳堀会長：隣の市でこれだけやっているのだから、八千代市でも参考にして出来ないか。習志野市がやっていることを活用して八千代市に取り入れてもらうとか。八千代市でも生後10か月までの母子を対象として実施して、そこから繋げていきたい。小学校、中学校にもお話しているので八千代市も同じように実施したい。

中嶋委員：例えば、八千代市は小学校22校ある。委員会でもアナウンスをお願いして、お

金の出どころはそれぞれ頑張るとして、先生方のスケジュールは、習志野市と隣の市と拡大している中で、八千代市の2校を行うことは可能か。

鶴岡委員：実施する人が増えてきていることと、希望する助産師はいるので出来る。色々なことをしながらの講演なのでできるかと思う。

柳堀会長：大学側として一緒になって入る余地はあるのか。

茅島委員：一緒に実施することは出来るかと思う。

柳堀会長：話をする側を育てる機会になる。育てていくというところでは、大学生側に興味を持っていただくこととは必要になっていく。

茅島委員：問題ないと思う。

柳堀会長：秀明大学の中で、学生で興味を持ち、話ができる人が出来るかもしれない。

東委員：秀明高校の授業の一部を行ったことはある。校内連携で高校1年生の全クラスの保健体育の一部を行う。教科書の性感染症の内容を行った。そういった生徒が居るなら、校内の連携で実施するのも可能かと思う。

柳堀会長：八千代市に看護学部があるので、是非ご協力してほしい。

茅島委員：保健師過程があって、何名かはこういった思春期の健康教育に興味のある学生が出てきている。助産師会で、関連する題名での講演があり、参加する学生もいる。

柳堀会長：展開できそうな気はするが。

茅島委員：場所の提供もしますので、使ってほしい。

柳堀会長：繋げられれば良いと思う。

茅島委員：11月9日、10日に大学祭があるので、その時にでも来ていただくと、どういうところか分かるので見て欲しい。

東委員：評価について。去年、東高津中学校に行き、今年は村上東中に勤務されている養護教諭がいる。その養護教諭は、何年も性教育の前後で自己肯定感のアンケートを学内で取っており、講義後、自己肯定感が大きく上昇している。東高津中学校2年生時に性教育を行い、その子たちの卒業する時に大変良い卒業式だったと言っていた。保護者も自己肯定感の向上を喜んでいて、先生方も進路指導等に関わる中で、性教育の影響であったと認識している。講師料は保護者の方から出ているかもしれない。それが事業評価になるか分からないが、目で見える指標として独自で行っている先生もいることを伝えたい。

茅島委員：自己肯定感について性教育の前後で見ているとのことで、性教育の指標として出ている。その結果も性教育を行う前に教えてもらえるので、「ここが高くなるように」と考えながら実施している。

事務局中村：予算は出ているのですね。

榊委員：異動した学校ですぐに予算を取ってもらえるのはさすがだと思った。

東委員：校長先生が理科の先生で理解してくれている。特別支援級等がある中学校だったので、とても大事にしている先生だった。

柳堀会長：鶴岡委員の話は講演の前のアンケートなどあるか。

鶴岡委員：村上東中学校では、その養護の先生からの引継ぎがあるので、事前アンケートは取っている。事前に聞いたことを織り込んでやると前のめりで聞いてくれる。

1・2年生で連続して関わるので名前も覚えてくれます。生徒が司会も行うので、生徒主体に実行していると聞く気で待ってくれる素敵な中学校だと感じている。1年生の二次性徴の悩みと、命の話をする時に、同じ質問をして自己肯定感が上がるかどうかを見ている。それは、明らかに上がるという結果が出ている。私立中学校では、皆さんスマホで行うので統計は取りやすい。松陰高校でも行っているが、アンケート結果、評価をパソコンでデータ入力して、メールもしてくれる。

柳堀会長：自分の講演が自己肯定感を上げているのか心配になった。養護教諭でやってくださっている人はいるが、基本的には、感想しか聞いていないので自己肯定感が向上したという評価は出来ていない。評価で見えると予算化に繋がるのではないか。それ自体が予算に繋がるかは分からないが。

中嶋委員：先ほどの浦安市の少子化対策基金で事業としてやっている事で、国や県からの補助金があるのかもしれない。そういった公的なお金を使えば実施できるが、「こういうものが大事だ」と管理職が重要と捉えるかによっていくらでもやりようは出てくると思う。ただ、学校はプログラムがいっぱいなので、教員が疲弊している中で新しいものを取り入れるのは難しい現状にある。ただ、僕が校長になったらやりたいと思う。

柳堀会長：早く校長になってほしい。やはり、トップの意識によって全然違う。

中嶋委員：その裏側には、教員たちを守るポジションでもある。負担がかかってその後のケアに何か必要だったり、波風を起こして誰か教員が犠牲になっていいかというわけでは思うので、慎重にタイミングと時を見計らわないといけないというのはどの管理職も思っているのではないか。

茅島委員：先生方が忙しいのは分かっているので、無理せずをお願いしたい。

柳堀会長：学校での性の取組みはどうか。各学校の姿勢はどうか。

中嶋委員：学校教育は公教育であるポジションなので、学習指導要領に示された履修内容をきちんと履修させる。学習指導要領の流れとしても、生活科で生まれてきた様子を学んだあと、突然5年生の理科で出産の話に飛んでしまう。国の言い方では、「合化的」というが、この教科でこれを教えるというのではなく、様々な場面で命の大切さに触れることになっていて、一番の基軸が道徳の授業である。先日、道徳は教科化された。道徳の授業を心の柱、教育の柱として扇の要に据えて、そこから各教科ごとに必要なものは繋げていく。教科の中で行き来しなさいと言われている。子どもたちの心に戻ってくるような教育をしなさいと、ここ3～4年前から言うようになってきている。先日、中央図書館で2020年に教科書の改訂の全面実施に向けて教科書が公開されていた。保健体育の教科書を見て、学習指導要領の内容を

主に取り入れているのだが、コラムのところに LGBT の事や、命の大切さ、性のことも入れていく会社もあれば、控えている会社もある。最近の話題を出す会社も増えた。教科書自体が、各教科の繋がりを求めるような構成になっているものが増加している。現場でどのような授業をすることが合化的で且つ保健の内容を満足させる事ができるかを誰も出せていないのだが、それは教育における永遠の虎の巻がないのと同じように、その時の各教師の力量に頼ってしまうことはあるかという現状。

榊委員：思春期ネットで中学生向けに作ったオリジナル教材は八千代市のデータを使っているんで、体育の先生が使えるところに載せている。中学校でどれだけ使用しているか分からないが、教科書の内容を実施する上で、あのパワーポイントがあると情報がつまんでいて、教科書の内容も網羅されているので、使いやすいのではないかなと思う。それを使用した授業も継続して使ってもらうように、養護教諭に紹介している。ただ、先生方の話を伺うと、講演は教科書では伝えられない言葉を伝えてもらえる聞く。教科書の言葉以外のところを膨らませて話をするというのは、養護教諭や体育教師では使えない内容も多いので難しい。養護教諭も外部講師を頼りにしてるので、先生方を呼んでやりたいと思う気持ちがありたくさんお声かけしていると思う。しかし、養護教諭は授業の時間を持っていないので、養護教諭1人では健康教育を実現するのが難しい。村上東中の先生が異動してすぐに出来ることは素晴らしいと思う。私は1年目ではできなかったと思う。そもそもやらなければいけないが増えているので、時間を学年全部に取ってもらう難しさや、いじめやインターネットの使い方の方が大事と思われてしまうなかで、性を一番に取り組む先生の力量はその時の学校の力量とか、雰囲気ですべて違うと思う。

柳堀会長：基本的な部分で我々が話す内容は保健体育の先生が行うのか。

中嶋委員：小学校は担任が話す。性感染症ではなく、薬物乱用とタバコと飲酒について話す。学校の事情において、ベテランの先生が授業を行う事もある。

柳堀会長：養護教諭は基本的には授業をもたないのか。

榊委員：学校の実態にもよるが、話をすることはある。

柳堀会長：それは学校の裁量によるものか。

中嶋委員：そうである。内容を伝えることが前提なので、誰が話すかは決まっていない。養護教諭も子どもたちに指導できる立場なので、話してもらうことはある。4年生で宿泊学習が始まるので、その前に生理の話をする時に、生徒は聞くのは初めてなので、男性教師が生理周期等は知っていて、「こういう時はこういった対策を」と知識はあるが、男性の先生より養護教諭が話したほうが子どもたちのクッションにはなる。そういった時は連携して、必要に応じて校内で調整する。

榊委員：二次性徴を話してもらった後に、女子だけ呼んで生理の手当ての話をする。学校の規模により養護教諭が話をできないこともある。来室数が多いと養護教諭が抜けら

れないなど、学校によって全然違う。

柳堀会長：学校は教師の負担が大きいのは分かる。思春期ネットを最初に立ち上げた時も、思春期の内容だけに取り組むわけにはいかないという実状も十分理解して大変だと思った。それを知らないと「なんで学校はやっていないのか」と思うことはあった。事情を聞くと、働き方改革とか、子どもを取り巻く環境の変化はあるので、学校の先生が今まで以上にやらなくてはいけない部分があるのは分かるが、我々としては、性教育の時間を取ってもらいたいと思う。

先生方から見て、前に比べて最近の性の特徴の変化はあるか。性に関心のない子も増えていないか。大人も独身者が増えている実態で感じている事はあるか。

中嶋委員：子ども達は異性に対する興味の芽生えにゆとりがある。僕ら世代は高学年で女子を意識して、中学校で付き合う話をしていた。今は卒業ディズニーがあり、男女のペアではなく、女子だけでペアルックしたり、男子だけデータコスプレしたりと、彼女と手を繋ぐチャンスなのにそう思わない人が多く、彼氏・彼女を作ることに焦りが無い。そのあとどこかで異性との付き合いが楽しいと自然と思えると良いが、そのまま大人になる人もいると思う。最近、クリスマスになると、恋人と過ごさないといけませんという雰囲気のマスコミの提示もなくなってきていると思う。ただ、ドラマはたくさんあるので、子どもたちも認識している。また、二極化していると感じる。小学校高学年で彼氏作るからと意思表示をして、廊下でベタベタする子もいれば、興味がない子と極端になっている。

柳堀会長：保健室では何かありますか。

榊委員：10年前と比較すると、インターネットが小学生にも身近にあって、ゲーム機で人と繋がる事で、そういう事で問題が生じることがあった。私の学校は鶴岡委員に来ていただいたが、やはりインターネットでの人との繋がりも内容に入れられないといけない。不用意に写真を撮って送ってしまったり、位置情報を出してしまう環境が10年前とは違う。ゲームでは、すれ違って出会えるようなシステムがある。そこで繋がって問題になりそうなこともある。以前では、大人が想定していなかったことが起こっている。自分のことを大事にするという事と、具体的なことも教えないとダメだと思った。2次性徴などは詳しく鶴岡委員に講演してもらったので大丈夫かと思うが、人との付き合い方も教えないといけない。

中嶋委員：告白して断られる事の痛みを受けなくなった。取りあえずラインを出して、良い反応だったら会ってみて、品定めしてから告白する子たちが多い。小学校6年生の担任をして、中学校になって異性に興味をもつようになった時は、告白は絶対に対面でやれと、携帯使うと上手くいかないよ、と伝えた。それでも対面の告白を避け、ラインで送信して、振られると「ごめん、冗談」とごまかして、自分が本当は好きだと思ふ気持ちから逃げる子供が増えたと思う。どん底まで振られて、這い上がるのも本来恋愛する上で心のパワーかと思うのだが。小さいミスを繰り返すと

恋愛に臆病になり少子化に繋がると思う。

柳堀会長：それはある。コミュニケーションに関して、学校の現状は。

中嶋委員：我々大人はスマートフォンを仕事上の必要なツールとして使用している。メールだけでなく、会って話す事の効果も知っている。しかし、スマートフォンから入った子どもたちは、心のツールにも置き換えられている時代に来てしまったかと思う。それは危険な事だと思う。

榊委員：今の若い世代の人は生まれたときに携帯電話があった方が多い。

中嶋委員：よく先生はどうやって告白しますか、と相談される。対面で伝えると答える。人前で恥ずかしければ体育館の裏とかに手紙を出して来てもらうと言うと、「会って伝えるなんて信じられない」と言われた。会わずに好きって言うのは逆にどうなっているのだと思ってしまう。

柳堀会長：今の学校の現状について聞いてみたいことはないか。内田委員は、家庭教育の指導の現場としての意見はどうか。

内田委員：今、中嶋委員が言っている事も分かるし、携帯電話の SNS でやり取りする子どもの両方の立場の気持ちが分かる。面と向かって告白することは大事と思うが、SNS での繋がりで友達と仲良くする大事さも分かる年代かと思う。どちらの意見も分かるのでどちらも良いところはあるなともいえない。

柳堀会長：現在、CM で世界中の人たちが一斉に曲を演奏して聞くというのがある。グローバルバージョンは大切なツールで、外国に行かなくても、外国の人と友達になれる、趣味を共有できる。

内田委員：ゲームは、昔は集まってその場でやらないと一緒に遊べなかったが、今は互いの家とか、全く顔の知らない人とも一緒に遊べるので、今と昔では感覚が違う。

柳堀会長：土井委員の対象の年齢は違うかもしれないが、見ている子たちの変化はあるか。

土井委員：全然違う。開業して 20 年くらいたつが、時間に追われて忙しい母親が多い。子どもを個々に見ている母親が減っている。母親はスマホをいじっている。母親用の雑誌は一切置いていない。絵本しかない。読み聞かせをしている母親もいれば、ずっと携帯を見ているため、呼んでもこない母親もいる。不要な情報収集をして時間に追われている。携帯でいろんなニュースが出ているから、全部チェックする時代。私も見ていると時間がかかるのでわかる。必要のない情報をたくさん得ようとしている感じがあり、それで時間に追われて子どもの様子や子どもの気持ちを見ていない人が増えている。時間に追われて情報過多で辛そう。情報に振り回される自分もいる。実際に「みたいな」と思うよりも「こんな話もある、あんな話もある」と目が離せない。お母さんたちも同じように必要のない情報収集に追われる毎日を過ごしていて、子どもが時々置き去りになる。また、習い事をたくさん行っている。子どもも頑張るので、「今日休んだら次の階級試験が 2 か月後になっちゃう」と言う。親もやらせたいし、子どももやる気モードになっているから、体調が悪く

でも習い事に行ってしまう。頑張っている母親はいっぱいいるが、情報過多のため、生き辛く心も体も疲弊している状況である。

榊委員：愛情不足を感じる子もいる。1年間、学校にいたのですが、初めての学校とは思えないくらい声をかけてくれる子が多い。私はそこに溶け込めてありがたかったのだが、みんなが話を聞いてほしくて大人を求めている。挨拶をすればみんな嬉しそうに話してくれる。

土井委員：声をかけてほしい、聞いてほしいと思う子が多い。家庭で話す時間がない。子どもたちの話をゆっくり聞いてあげる時間を作ってほしい。この携帯というツールで、自分にとって必要のない情報を見てしまうから、子どもの心は置き去りになる。

榊委員：おはようと声をかけたら「あのね、こんなことがあってね、」とたくさん話す。地域性もあるかもしれないが、性の話もやらなきゃというよりは愛情不足の子たちに対して救うことが大事になっている。子どもは一人の先生を取りたいので、先生も振り回されている。授業も振り回されて授業にならなくなってしまう。特別支援アドバイザーの先生にアドバイスしてもらって、子ども達への効果的な指導を教えてもらおう。落ちついて過ごすために、そこに力を入れないと、みんなが楽しかったと帰れるようにならないので、エネルギーを注がないといけない事があった。

土井委員：思春期って年齢が上のイメージで、私は小さい子をみているのだが、子どもたちは何歳でも、自分の事を言えるから聞いてあげることが一番だと思っている。ゆっくり話を聞いてほしい。お母さんと子どもの主訴は違う。子どもに聞くと、1週間前からだったと。親に痛いと言いたくても、親の顔をうかがって言いたいことを言えない。「主訴はこの子にしかわからないから。ずっと痛かったのね。」と言って、話をさせるチャンスを与える必要性がある。今は、痛いと言いたいけど、「親は忙しくて、他に重要なことがあるのだな。」と思うと言えない。とにかく、子どもの声を聞く、子ども達は意見を持っているから、話をしてチャンスを与えてほしい。

柳堀会長：それぞれの立場で、思春期をどう見ているか。思春期だけでなく、子どもたちへの親の影響は聞きたいところ。

土井委員：普通の母親たちも次の日仕事だから、解熱剤飲ませて朝下がってればいい、と思う親の都合で登校させ、昼に発熱して迎えにくるのは夕方。診察は18時までなので、夕方遅くに受診する。この子がどれだけ辛い思いで一日過ごしたか分かっているかと、本当は母親たちに言いたいのが、子どもにねぎらいの言葉をかけて対応をしている現状で、それでも子どもたちを休ませることをしない忙しい親が多い。

柳堀会長：耳が痛い人たちはいっぱいいると思うが、そこが現状である。和田委員はどうか。医療センターで10代妊娠担当ということで、若年の妊婦とか、傾向が変わってきたとか、今の現状はどう思うか。

和田委員：うちの病院は生保を受け入れる医療機関なので、生保の人が良く来る。その中でもシングルが多い。希望してシングルになっているわけではないと思うのだが、

シングルになってもあまり不安がない。というのは、周りに離婚してシングルの方も多し、元々結婚せずに子育てしている人もいるので、困ることがないのと結婚する必要性を感じないという方がいる。日本は生活保護をうければなんとかやっつけていけるからという方は何人かいる。それでも、子どもはほしいという方はいる。SNS で人と繋がり、仲が良い人と性交渉して子どもも授かるが、相手に結婚してほしいわけではないという人もいる。SNS を使用して知らない所に行ってしまう、どこで出産するかわからない人が出てこないように対策をするのが大変。

柳堀会長：そういう人は多いか。

和田委員：生活保護もシングルの方も結構多い。

柳堀会長：シングルはシングルとして、生活保護は生活の基盤がない。

和田委員：そのため、若い子が多い。

柳堀会長：私も生活保護の方をみるが、この方は別に生活保護ではなくてもよいのではという人が多い。私がみている生活保護の方は精神疾患が多いので、妊娠は関係ないが、どうかなと思う。

和田委員：10代に妊婦でも、結婚してから出産する方もいる。

柳堀会長：年間で10代の出産はどのくらいか。

和田委員：TYMC での10代の出産は、月1例はある。

柳堀会長：今年で一番の若年は何歳か。

和田委員：16歳が一番若い。

柳堀会長：次回にでも和田委員に予期せぬ妊娠の例など、医療センターで10代を受け持ったケースの話をしてもらいたい。過去にも10代の妊娠として、予期せぬ妊娠で出産した方など、3名程度の話をしていただいて、共有したいと思うのでよろしくお願ひしたい。今日、PTA として参加してどう感じたか。

宮崎委員：初めて聞くような内容ばかりで驚いている。

柳堀会長：男の子の性については父親がしましようといった話は家庭ではないか。

宮崎委員：今のところ全く家庭で性の話はしたことはない。

柳堀会長：それが普通だと思う。現在、男の子に対する性教育が結構注目されている。家庭内で説明するのは難しいと思うので、外部講師を呼んで話をしてもらうのが効果的。最初、この会に来て驚いたと思うが、1年くらいするとこの話が当たり前のようになってくるので、何か意見があればお願ひしたい。

宮崎委員：色々な意見を聞けることで、貴重な一日。勉強になった。

柳堀会長：PTA の会長はとても発信力があるので、よろしくお願ひしたい。

先ほど伺ったが、内田委員はどうか。

内田委員：様々な話を聞くのが初めての事が多く、新鮮な気持ち大きい。勉強になった。

柳堀会長：今の立場から思春期に関係する内容を伺って、次回、鶴岡委員や和田委員から実

際の話をしてもらう機会をお願いしたい。

思春期学会について、座長をされた茅島委員から報告をしてほしい。今の日本の思春期学会の最先端でどのような話が出ているのか、トピックスはどういうものか、少し時間を使って簡単に説明をお願いしたい。

茅島委員：今回の会長は、東邦大学医学部の泌尿器科の教授の先生で男の子の性の話とか、男性不妊症の予防というのがあった。男性不妊症は精巣に炎症がおきた時に造精機能に影響を受けて性器に障害を受ける。その原因にムンプス等もある。精巣捻転では、突然精巣に痛みを感じて受診する方がいる。できるだけ早く手術を受けないといけないといった話があった。もう一人の先生は、実際にどのように治療していくかという話だった。他には、思春期世代のがん患者に関する治療ということで、温存療法で卵巣組織の凍結移植というのが話題になっているのだが、治療を受ける時に化学療法や放射線療法だと卵巣機能が低下してしまうことがある。その前に卵巣の組織をとっておいて必要なときに卵子が取り出せるという話だった。

教育講演1は小児看護学の小児期発症の慢性疾患患者の成人移行期ガイドという思春期支援学会を作っていて、これを思春期学という雑誌に載せる予定。慢性疾患をもっているお子さんにどのように支援したらよいか雑誌に掲載する。SNSの危険性があるためワークショップでモラル教育が必要である。千葉思春期研究会の時に来ていただいた宮崎さんが、SNSについて詳しい方で、インターネットの情報は外から全部見られるので気を付けてほしいということと、その中で生きづらさを抱えているという話だった。岩室先生は、男の子の悩みについて、今の性教育における思春期学会の役割として、「外部講師だからこそ可能とするために」という話をした。外部講師だから言える事もたくさんあるので、どうやって現場の先生と外部講師が連携していくか、先ほど指導要領の話もあったが、それを見ながら外部講師は指導していかないといけないと強調していた。スライドというより語りを入れて想像力を養うのも効果的とのことであった。

LGBTの話もあった。それから、月経困難症のピルの使用についても話があった。ピルについては柳堀会長の方が詳しいとは思いますが、どういう風に診断して治療をして治していくか。あとは、私が一番関心があるのは、HPVワクチンについて。今、思春期学会がなすべきことについて、川名先生という日本大学の先生のシンポジウムを聞いた。今後HPVワクチン接種を推進するにはどうしたらよいかという話で、それぞれのシンポジストの方が納得できるような話をした。私が心配しているのは、副反応についてで、今度、鹿児島県で開催される、第39回日本性科学会学術集会に参加し、副反応としての自己免疫性脳炎について、高嶋博（鹿児島大学脳神経内科学教授）の話を知りたいと思っている。実は、副反応のある高校生と会っている。スポーツウーマンだった子で、1回目も少し疼痛あり、2回目接種後、毎日インフルエンザのような高熱になる状態が続いている。お会いした時は車椅子で

来られた。副反応の確率は低くてもその方にとって1度起きてしまったら100%である。慎重に投与したほうがいい。子宮頸がんは予防したほうがいいが、副反応とは別々に考えて、情報を提供し、なぜそうなっているのか、ということを知らないと指導はできない。私が教えている学生でワクチンを打っている学生は少なかった。その子たちもいずれはワクチンを打つかどうか悩む。その時に正しい情報を伝えないといけない。今回も高橋先生という産婦人科医が、出来るだけ接種したほうがいいのではないかと話していた。やはり、接種することの効果と副反応の情報、メリットとデメリットを説明し、本人に決めてもらう材料を提供する役割があるのではないかと話していた。私はその通りだと思っていて、今の小学校6年生から高校1年生までであれば、無料だけれども、それを過ぎると約4万円かかってしまう。それを考えると、その情報を知らなかったという方が多いので、それを含めて、それぞれの話を伺いながら、子宮頸がんを予防したいということ、それと共に副反応への対応も必要ではないかと考えさせられたシンポジウムだった。副反応になりやすい時期や、副反応がある方は避けて、接種するのがいいのかなど。

緊急避妊薬により予期せぬ妊娠を防げるかという点で、緊急避妊ピルは、望まない妊娠を避けるためには必要だけれども、他の部分では上手く使えないと聞いた。また、発達障害が最近話題になっていて、大井先生という産業精神医学の先生が、対話することの大事さということで、薬を使わずひたすら聞くという治療について話した。ただ、会場の中から、傾聴と対話と何が違うかという質問で、傾聴するだけでは効果がなく、対話することは傾聴しながらも、きちんと話を返してあげることが大事とおっしゃっていた。当事者同士が自分の症状について語り合うことが、これと似ていることを大井先生に伝えると、一緒に実施しているということで、面白いと思った。男の子に知って欲しい男になるための必須知識ということで、小森先生がお話されていたが、教育テレビにも出演されている方で、とても話がお上手な先生。「4つの玉の話」というお話をされていた。後は、児童養護施設を出るときに、どのように性について教育するかということで、指導員の認識と保育士の認識の違いを研究されていて興味深いと思った。

柳堀会長：婦人科医としてはHPV推奨派である。実は高橋先生の資料があるので、次回機会があれば話したいと思う。どっちが良いというわけではなくて、婦人科の立場からなるため、医師がHPVについてどう考えているか参考になればと思うので紹介したい。

岩室先生にもシンポジウムに講師として参加してもらったことがある。泌尿器科の性教育として最先端でやっていただいている。岩室先生の「コンドームの達人」で検索してね、と生徒には伝えている。

思春期のトピックスは、網羅されていた。時間なので何か周知、連絡はあるか。

内田委員：次の家庭教育講演会のお知らせで、第2回が11月1日に思春期の子を持つ保

護者向けに開催する。子ども自身が感情をコントロールできるようにするために、感情の育ちを学ぶ。内容としては、子どもの感情だけではなく、保護者の感情コントロールを学ぶ場になっているので関心を持っていただけたら、10月1日から申し込んでほしい。

柳堀会長：もしよければ、周りの方を誘っていただいて、行っていただければと思う。他にはあるか。

土井委員：病院にきた母親に渡す本の紹介。本にはカバーを付けている。最初は患者に感想を聞きたいので興味ある方には読んでほしいと伝える。そこから、よかったら回し読みしてくださいと伝える。30冊くらい無料で配布している。子どもとの関わりが変わると思う。マルトリートメントというか、自分は虐待を受けているのかもしれないと考える機会になる。本当は高校生に読んでいただきたい内容。出産前はブルーになるので難しいかもしれない。産婦人科に半年前にお渡しして、反応がよかったら読んでいただいて、よくなかったら読ませなくていいですと伝えている。その後は話を聞いていないのだが、自分としては高校生なら理解ができて、自分の子育ての指標になると思う。読んだことのない方がいれば貸すので、読んでほしい。中学生に赤ちゃんを見せて「自己肯定感が上がる」があった。自己肯定感を上げてほしい人はたくさんいて、脳にダメージを受けるという話を分かりやすく書いてあるので読んでくださいと伝えている。子育ては自分自身が親からうけた教育があるからそれでいいんだと思ってしまう。そうではなく、多種多様な子育てがあるが、間違っているものを根付かせてはいけない。今の子どもたちに伝えて阻止することが大事ではないかと思う。子どもは吸収が速いから変わるはずで、大人は変わらない、そのためには教育がベースとなるの。

柳堀会長：事務局からあるか。

事務局松枝：中学生向けリーフレットを配布した。アンケートは集計後報告する。

柳堀会長：次回の会議は11月。次回は鶴岡委員の講演をお願いしたい。

鶴岡委員：どのテーマの話が良いか。

柳堀会長：手作り教材が見たい。全部聞きたい。対象は幼児から小学校までの保護者向けで、教材を使っての話をお願いする。基本的には公開する形で良いか。話を聞きたいという方があれば、来てもらって良い。

以上